

連載 ⑭  
バンコクの  
日本人

## 美貌の初代公使夫人 稲垣栄子 XI

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

稲垣満次郎・栄子夫妻には子孫がない。栄子の遺品はどうなっただろうか。特に本誌の今年の2月号で紹介した、栄子がチュラーロンコーン国王から賜ったラッタナーポーン・メダルは現存しているのだろうか。

稲垣満次郎の兄、雄太郎の孫に当たる稲垣健一氏（1929年生、愛知県立高校の教職に長く従事されていた）の話では、満次郎・栄子夫妻の遺品は一番下の妹寺井幸子さんにあげたといい。7月7日に、筆者は鎌倉に幸子さんを訪ねた。

幸子さんの夫君、寺井愛宕氏は、1987年7月から89年8月末まで第26代横須賀地方総監（海将）を務められて退官された海上自衛隊の高官である。愛宕氏の父君は、日米開戦

時に在ワシントン大使館で海軍武官補佐官であった寺井義守中佐で、戦後第4代横須賀地方総監（海将）から海上自衛隊幹部学校長のうち1961年に退官されている。一方、幸子さんの父君である稲垣次郎氏は、神戸高等商船学校教授から戦後1947年5月に海上保安教習所の初代所長に就任し、49年には初代海上保安庁次長に就任されている。

稲垣次郎氏は雄太郎の次男（但し、長男は夭折したので実質上は長男）であり、その下に3人の弟があつた。次郎氏の長男である稲垣健一氏は、祖父雄太郎のことは殆ど何も知らないという。

健一氏が聞いたところによれば、祖父の雄太郎は満鉄などの

株式に投資して大失敗して最後は破産し、平戸の家屋敷も失つたという。そのためか、父の次郎氏は雄太郎のことを殆ど語るものがなかったそうだ。

多分、稲垣次郎氏とその母サダ（雄太郎の妻）に取材して書いたと思われる、葛生能久著『東亜先覚志士記伝 下巻』（黒龍会出版部、1936年、766・767頁）の稲垣雄太郎の項には、次のように書かれている。

「稲垣雄太郎、旧平戸藩士天野勇衛の長男。安政六年「1859年」肥前平戸に生る。『東方策』の著者稲垣満次郎は其弟である。幼にして父を喪ひ、弟満次郎と共に叔父本澤五郎の扶育を受け、稍々長じて玉置謙齋に学び、又た佐々村の時習館主

秋永桂蔵に就て漢籍を学んだ。桂蔵が時習館を閉すに及び去つて鹿児島に遊学したが、西南の乱起るに会し長崎に赴き叔父山川景範の許に身を寄せてゐた。当時薩軍の将士捕はれて長崎に護送せらるるもの多く、之れが監守の爲めに警官及び獄吏を募集してゐたので、景範の勧めにより雄太郎は警官に、満次郎は看守となり、囚徒の取締看守に従つた。雄太郎は当時青雲の志鬱勃禁する能はず、乱後職を辞して露領浦潮「ウラジオストク」に渡航し、在留すること十数年、自ら商業を営み、時に或は西伯利亚奥地の探検に従事し、露国東侵の状勢を観察調査するに努めた。その調査資料は弟満次郎の東方策論の参考資料となつたものが多かつたといは

2011.9  
2011.9





スペインで撮影したと思われる栄子の写真（寺井幸子氏所蔵）



れてゐる。日清戦役後帰朝して沈没した支那軍艦の引揚を計画し、日露戦争に際会して亦大に画策する所あつたが、事志と違ひ爾来長崎に閑臥し、大正元年八月十六日病んで佐世保に没した。享年五十四。遺骨は郷里平戸に葬つた。(遺族、神戸高等商船学校教授、稲垣次郎)

稲垣満次郎自身は、1892年に「家兄稲垣雄太郎亦夙に大に見る所あり浦鹽斯徳「ウラジオストク」に在留するもの茲に十三年 昨年五月露国の西比利亜鉄道に着手せんとするに際し大に其機を得たるを喜び起て其下受をなすことを結約せり 然れども故ありて果さず 予太だ之を憾む」(稲垣満次郎「西比利亜移民論」、新聞『日本』1892年2月15日号)と語っている。雄太郎と満次郎が1881年に一緒に撮った写真が残っている(平戸市史編纂委員会『想い出の平戸』、1998年、120頁)。雄太郎はこの

頃、ウラジオストクに発つたのであろうか。

ウラジオストクの雄太郎は、1890年6月には、日本海で最初に操業した近代捕鯨船(捕鯨砲で榴弾付きの銛を鯨に打ち込み、ウインチで引き上げるノルウェー式捕鯨船)をロシア人の所有者から借り上げて、平戸周辺で捕鯨を行おうとして許可を同地の日本領事に申請したが、外国船を理由に却下されている(神長英輔「北東アジアにおける近代捕鯨業の黎明」、『スラブ研究』49号、2002年、57・58頁)。また、1905年8月19日付で稲垣雄太郎(住所は佐世保市松浦町)は、桂太郎外相に「日露事変に付損害御届、一金、六千八百式拾五円也(露貨六千五百留) 右者明治参拾六年中旅順口に於ける露国海軍所屬船渠用之船舶付属品の内長崎市元馬込町石川鉄工所へ注文製作中明治参拾七年一月央其の壱部成就仕候に付長崎駐



↑栄子がチュラーロンコーン国王から賜ったラッターナーボン・メダル →スペインで撮影したと思われる満次郎の写真(寺井幸子氏所蔵)





在露国領事を経て露国海軍旅順鎮守府に向け右に對する代金露貨六千五百留の送金を請求中開戦と相成前記の金額全部損失に歸し候に付此段御届申上候也」(外務省外交史料館、外務省記録5門2類17項、「日露戦役個人損害關係法律並に勅令に基く救恤金關係雜件」)を提出している。

以上の例から見ても、雄太郎の諸事業はツキから見放されていたことは間違いない。

さて雄太郎の孫に当たる寺井幸子さんとの話に戻ろう。鎌倉

で幸子さんにお会いすると、まぐろのラッタナーポーン・メダルとスペインで撮影したと思われる満次郎・栄子夫妻の写真を見せて下さった(写真参照)。満次郎の勲章などの遺品も残っていたが、夫が転勤族なので転居のたびに処分してしまった。しかし、このメダルだけは、小さいので女性にも装飾品として何か使い道があるだろうと手許に残していた、とのことである。メダルの由来も何も知らなかったが、今度筆者の原稿を読んで、初めて栄子がチュ

ラーロンコーン国王から賜ったものであることを知ったそうである。

幸子さんは、次郎氏の三女で末娘である。幸子さんが高校3年生か大学生になったばかりの頃、次郎氏が彼女を連れて目黒の鷹番町の栄子の自宅(一軒家)を訪ねた。その頃の栄子は今の幸子さんと同じ70歳代の半ばで、当時163センチあった幸子さんから見ると、大変小柄な人に見えた。親族が言うのもおかしいが、上品で美しい人であった。この訪問の理由は、栄子から次郎氏に末娘の幸子さんを稲垣満次郎家の養子にしたいという話があったからだろうと思われる。

次郎氏は、娘を養子にやるには栄子のところに相応の財産が残っていることが前提と考えていた。これは親としては当然の情であろう。しかし、栄子の回りには、取り巻きがいて、その中の一人は土岐さんという男性

であったが、彼等が食いつぶして、既に大した財産も残っていないように見えた。そのためか、或いは、大柄で活発な幸子さん(幸子さんは新人類のはしりだと自称された)が栄子のお眼鏡に適わなかったためか、養子の話は立ち消えになった。

幸子さんの夫が呉で勤務していた時代に、栄子は亡くなった。父の次郎氏が栄子の遺骨を平戸の最教寺の稲垣家の墓所に入れた。納骨の帰りに次郎氏が幸子さんに納骨を終わったと電話して来た記憶が残っている。

栄子が死亡した際に、次郎氏は満次郎や栄子の勲章、勲記、写真、大礼服などを貰っただけであった。娘一人しかいない長男の健一氏は、これらの満次郎夫妻の遺品は、夫が海上自衛隊に勤務する妹の幸子さんのところの方が、何らかの使い道があるかも知れないと考えて、幸子さんに与えたのだった。

※次回からは「日本タイ研究」第号 岩本千綱です。